

## 『リスニング第4問B徹底演習』の改訂にあたって

### —ここ数年で平均点はなぜ急激に落ちたのか？

月日の経つのは早いもので、2006年1月のセンター試験で導入されたリスニングテストもすでに今年の1月で4回目を実施された。第1回の平均点は百点満点換算の72.50点で、このテストの感想を現場の先生方に求めると、「特別な対策は不要でしょう」という声が多かった。しかし、その後の3年で平均点は64.94点→58.90点→48.06点と大幅な減少傾向を示している（大学入試センターHPより）。

いったい7割を超えていた平均点が5割を切る事態に至った原因は、どこにあるのだろうか—大学入試センターでは年度ごとに自らが作成したテストの評価を「試験問題評価委員会報告書」という形でHPに掲載している。この報告書には、リスニングテストに関する評価も当然ながら載っている。例えば、第4問Bの評価では、本文スクリプト中での表現を選択肢で言い換えている、その言い換え表現が難しいと、それだけ正答率が下がるといった趣旨の記述がある。

しかしながら、極めて重要であるにもかかわらず、この報告書であまり触れられていない事項がある—それは読み手の質・読み上げの速度・読み方そのものに関する評価である。

他方で、初年度の「バーミューダを台風が襲ったときの話」から、第4問Bのスクリプトそのものは基本的に変っていない。

- ①総語数は180語台半ばで、起承転結のある3パラグラフ構成である。
- ②1文が長く、関係代名詞など従属節が後ろに続く構造が多用されている。
- ③doomedなどの難しい単語も使われている。

スクリプトだけを見ていると、とても高校生の手には負える代物ではないのである。そして、このような難しいスクリプトがリスニング・テストとして成立していた理由は、生徒が聞き取りやすいように、十分すぎるほどのポーズを取っていたからである。

2006年の第4問Bの冒頭はこう始まる。

In today's program // I'll tell you an amazing story about something / that happened in Bermuda / about fifty years ago.

まず In today's program の直後に長いポーズが置かれ、その後は関係代名詞の that happened in Bermuda でも、さらに副詞句の about fifty years ago でも、いささか不自然とも思えるほどにゆったりとしたポーズが置かれていた。その一方で、すべてが遅いのかと言うとそうでもなく、I'll tell you an amazing story では、下線部で音の連結も生じていて一気に読まれていた。

しかしながら、このゆったりとしたポーズはここ2年ほどで完全に消えてしまった。厳密に言えば、一昨年で消え始めたものが今年に入って完全に消え、ごく普通の長さのポーズに戻ったのだが、これがすなわち、第4問Bに顕著に現れて、なおかつ全体に平均点を大きく低下させた主原因だと考えられる。

読み上げ方が変わってきたのであれば、当然その対策本はその傾向の変化を踏まえたものでなければならぬ。従って今回の『リスニング第4問B徹底演習』の改訂版では、すべての音声収録し直すことにした—不自然なポーズは一切やめて、なるべく今年の本番の音声に近づけることにしたわけである。

ここ数年の傾向（文学賞やオンライン雑誌の話題）を採り入れた新しい題材を5本用意したので、「聞いてみると面白い！」という本書の特長はさらに強化されている。さらに本書では強弱・ポーズ・連結を細かく表示したスクリプトが用意されている。これを確認しながら音声CDを繰り返し何度も聞くことで、生徒の「英語耳」は相当に鍛えられるはずである。